

解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい

— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

私たちは日々、何かを食べて生きている。このことは、人類学が教えるさまざまな知見のなかでもとりわけ力強く、人類の普遍性を物語っているように思われる。世界中どこに暮らし、どのような集団に属していても、たしかに人は必ず何かしらの食材を加工して「食べ物」を生み出しているし、独自の作法に従ってそれらを食べているからだ。「食べる」という営みは、自然と文化の境界を超えて私たちの身体をつくり、社会性の輪郭を描き出してきた、と言えるかもしれない。

この場合の社会性とは、精神と身体という二元論を越えた次元に存在している。たとえば「我考える、故に我あり」というルネ・デカルトによる有名な自己の存在証明は、「その考える《我》の身体は I」という、先行する問いを隠している。デカルトの「考える主体（コギト）」は、おそらく考えることに先立って、何かを食べてきたはずだ。私たちは皆、自分自身が過去に食べた食べ物によって生かされ、それによって思考したり活動したりすることができ

る。栄養学的に考えれば、私たちの身体は、日々の生活で摂取される

食べ物によって創られ、維持されてゆく。私たちの日々の活動も、食べ物によって得られるエネルギーを前提としている。この観点からすれば、食の営みは、思考（精神）を支える生物学的な基盤としての身体を、「考える主体」に先立って準備している、とも考えられるだろう。

ところで、レオン・カスは食事を「他者」を均質な物質に変えて吸収する身体的な活動と考えていた。しかし「食べる行為」を出来事として観察してみると、^①もともと食材が持っていた他者性が、彼が考えていたほど簡単に解消されるものではないことがわかる。たとえば食事の効果として、気分が落ち着いたり、高ヨウ^Aしたり、胃腸がもたれるような効果も現れるし、嘔吐や下痢や^②酩酊をもたらし、^①こともある。場合によっては、死に至る病をもたらし^②こともある。逆に病気を癒し、健康を保つのに役立つ食べ物（薬）もある。いずれにしても、食べることを通じて、食べ物は外の世界から私たちの身体の内側に入り込み、主体の忘却や無関心をものともせず分子レベルで解体・吸収され、何らかの作用を及ぼすのだ。だからこそ、いつ何を食材として選び、どうやって調理し食べればよいのかという、地域食における「可食性」のコードが、地球上のどの文化においても構築されてきた。

【イ】食文化とは、こうしたコードに従って、自然という「外」の領域から社会というコントロールされた空間の「内」へと、私たち自身の血となり肉となりエネルギーとなる資源を得る生産技術の体系である。かつて、私たちの先祖は、「生物」を「食物」に変えるために、狩猟や解体や調理の技術を育み、祈りや儀礼や祭りや食卓作法を生み出してきた。これらは社会的身体③の「外」にあるものを「内」に変換する技術である。たとえば、「郷土食 local food」の文化を知ること、海・川・湖・森・林・草原・田畑・牧場といった人間にとって身近な自然環境についての知識をもとに、どの時期にどんな生物を収穫し、または栽培・飼養し、これを屠殺・解体し、調理・保存するかという地域的な知恵を身につけることを意味していた。

【ロ】可食性のコードは、その地域に住む人びとが食べることでできる生物種を規定し、反対に何を食べてはいけないかという、社会的な禁忌④を作り出す基準となる。たとえば、牛、豚、馬、犬、猫、鼠、蛇、蝮、鯨、猿といった動物は、それぞれある社会においては可食的な肉として認識されるが、別の社会では肉食禁忌の対象となる。昆虫食のように、それに対する情動的な反応はより強くなる場合もある。私たちの食べる食品は、このような可食性の網目の中で

選定され、加工されてはじめて食べられるようになったはずである。その過程には、複数の「考える」④《我》が関与することになるが、重要なことは可食性を判断する基準は、無意識的な慣習や禁忌によっても規定される、という点にある。

【ハ】しかし、だからといって、「食べる」という行為の全ボウ⑤が、いつも私たちの意識にのぼっているというわけではない。私たちは食事中にも空腹や喉の渇き、味や香りや色彩といったさまざまな感覚的な刺激を受け取っている。もっと繊細な次元では、料理された食べ物の味や質感やぬくもりを感じ、食事中の会話や空間の雰囲気、食器の触感やデザインを楽しむながら、口や舌や鼻や耳を総動員してそれらを味わっているはずだ。食べることの根幹には、そうした身体⑤の感覚的要件が存在する。

【ニ】食べ物は、単なる物質ではなく、情報でもある。だからこそ、社会的な出来事としての食事が成立する。食事するとき、私たちは身体の奥から湧き上がってくる飢えを満たすだけでなく、さまざまな情報を取捨選択しながら食べ物を噛み砕き、舌で味わい、口腔⑥の奥で嚥下している。それは生物としての必要性に根差した生々しい行為であるからこそ、文化的な作法や規則にも関係付けられている。食事という体験の根幹には、食べ物をおして時間と空間を

結びつけ、他者と体験を共有しながら、食べ物をより良く味わおうとする積極的な心の働きも認められる。

【ホ】しかし、「喉もと過ぎれば熱さを忘れる」というように、食べ物には口のみならず消化過程という無意識の運動に委ねられてしまう。食べ物はこの消化過程を通じて異物性を失い、内臓器官と排泄器官を貫く長いトンネルのみならず消化吸収され、残りは体内の微生物の死骸とともに排泄される。その過程で、とりわけヒトの腸に住み着く膨大な細菌類は、自らも身体の外部的から侵入した異物を消化する働きを助けている。土壤生態学者のデイビッド・モントゴメリーとアン・ビクレーが述べている通り、このような共生圏の構造は、植物の根茎が地下で形成する構造にそっくりである。根と腸は、異種のコンタクト・ゾーンであり、そこで微生物は、宿主の生存に欠かすことのできない二つの要件に関わる。それは、エネルギーの摂取と、敵から身を守ることである。この二つの器官を観察すると、他種との共存による協働のパターンが、集合体レベルでの生命活動の維持に関わっていることがわかる。

植物の根茎と動物の腸は、構造的には互いにチューブを裏返したような反転関係にあるのだが、いずれも生物の個体維持には欠かすことのできない細菌との共生圏を形成しているのだ。人間にとつて

も「食べる」という活動は、このような共生圏に棲む無数の他者の力を借りて、異物を吸収し、危険物を排出しようとする、内臓の中で起こる底なしの生命の運動に通じている。それは知覚の快楽と欠乏感がせめぎあい、欲望と満足、生と死が波のように押し引き人間性の境界でもある。それは私たち人間という存在の生命活動の根拠であり、心と身体のもっとも深い次元へと続いている。それゆえ、私たちはデカルトの論理をさらに突き詰めて「我食べる、故に我あり」と表明し直さなければならぬし、「考える《我》」に先立つ「食べる《我々》」^①「複数の主体」の思考と無思考の間へと、食をめぐる複数種の問いを進めなければならないのだ。

食べ物は、私たちの存在に先立って思考を可能にし、生命活動を稼働させる。それにもかかわらず、食べ物はあまりにも謎めいていて、捉えがたい。ひとたび食べ物について考えようとするれば、それはかつて生きていたときの動物の足取りで軽やかに《我》の思考から逃れ去り、植物の慎ましさを^Eもって沈黙の領域に逃れてしまう。だが、共生細菌の例が示すように、「食べること」を通して、食べ物は物質の次元と心的な次元をⅡし、情動や健康状態を左右する。食事は単なるエネルギーの摂取ではなく、私たちの欲望の充足であり、その露出であり、食卓を共にする人々との体験の共有

であり、生活の欲びの表現でもある。食べることがなければ、私たちはかくも多様な仕方^①で生存し、複数種の共生体である身体を持って、生命を謳^F力することはできたのだろうか？

「食べる」ということは、他の生き物の身体をエネルギーに変えて利用し、それによって食べた者自身が生き延びることを意味している。「考える主体」にとって、その思考に先立つ存在を敢えて「他者」と規定するならば、私たちはまさに、他者の〈からだ＝身体〉を「食べて」生きていくことになる。他者の身体は、私たち自身の血となり肉となり、息となり思考となつて、「食べる主体」を形成する。しかし同時に、その主体はすでに単数ではなく、体内に膨大な他者（微生物）の寄宿者を抱え、それとともに食べ、食べられてもいる。

そしてこの過程で生じたザン滓^Gもまた、少なくとも理論的には、自然界に返還されることで、他の生物にとっての生きる糧となる。ヒトは、究極的には他の動物と同じく死骸となり、地球上の物質循環過程に帰っていく生き物である。「食べること」や「食べられるようにすること」の生物学的な条件にまで遡れば、私たちは自然に、動物と人間に共通する身体の構造や条件を考えを及ばざるを得ない。「食べるもの」であり、同時に「食べられるもの」でもあると

いう相互的な条件は、人間だけでなく他の動物にも共通しているからだ。動物は走り、這い回り、泳ぎ、飛翔して、自分を食べてしまおうとする外敵から逃れ、また今度は反対に、自分以外の生物（餌）を捜して、どうにかこれを捕食しようとする。

先に述べたように、食という営みを深く捉え返そうするとき、一人の「思考する主体」に先行する「食べる主体」の次元に光を当てることが求められる。だが、そこで浮上する「食べること」の背面には、当然その行為の反転像である事態が予測されることになる。それこそが「我食べられる」という次元であり、ヒトの身体は、さまざまな動物たちによつて、じつさいに食べられてきた。特に現生人類以前のヒトの条件を探る自然人類学者たちは、他の動物がヒトを餌にする事態がⅢとして繰り返されてきたことを、明らかにしている。それは自然史的な現実であり、食物連鎖の中にある動物としては、例外なき事態であったのだ。

（石倉敏明「複数種世界で食べること」より）

問一 傍線部A、C、F、Gのカタカナの部分に漢字で書いたとき、傍線部に同一の漢字を使うものを次のイ〜ホからそれぞれ一つずつ選び、その符号をマークしなさい。

A 高ヨウ

- イ 善行を称ヨウする
- ロ 文明のヨウ籃期
- ハ 寛ヨウの精神
- ニ 両親を扶ヨウする
- ホ 斜ヨウ産業

C 全ボウ

- イ 共ボウによる犯行
- ロ 近ボウの風景
- ハ ボウ外の幸せ
- ニ 王者のような風ボウ
- ホ 仕事にボウ殺される

F 謳カ

- イ 半カ通
- ロ 一カ言
- ハ カ人薄命
- ニ 隔カ搔痒
- ホ 四面楚カ

問二

傍線部B、D、Eの読みとして正しいものを次のイ〜ホからそれぞれ一つずつ選び、その符号をマークしなさい。

G ザン

- イ ザン時の猶予
- ロ 明け方のザン月
- ハ ザン首刑となる
- ニ ザン敗を喫する
- ホ 贅沢ザン味の暮らし

B 蝟

- イ イナゴ
- ロ タコ
- ハ カエル
- ニ ハチノコ
- ホ タガメ

D 嚙下

- イ ヒゲ
- ロ スイカ
- ハ エンゲ
- ニ コウカ
- ホ タンカ

- E 慎ましき
- イ ヤましき
 - ロ ツツましき
 - ハ タクましき
 - ニ カシましき
 - ホ イタましき

問三 次の一文が入るべき箇所として最も適当なものを問題文の

【イ】～【ホ】から一つ選び、その符号をマークしなさい。

誰もが、日常的に食べ物を口にし、消化し、排泄している。

問四 空欄Iに入る言葉として最も適当なものを次のイ～ホから一

つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 何のために存在するのか
- ロ 何処に位置しているのか
- ハ 何を欲しているのか
- ニ 何からできているのか
- ホ 如何様に食べるのか

問五 傍線部①「もともと食材が持っていた他者性が、彼が考えて

いたほど簡単に解消されるものではない」とあるが、「食材が持っていた他者性」が「解消されるものではない」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 食材は、主体の内に取り込まれてその輪郭を失った後も、主体の心身に影響を与えらるということ

ロ 食材は、容易には取り去ることのできない苦しみや異物感を、長期的に主体に与え続けるということ

ハ 食材は、主体が意識していないにもかかわらず、情動に対して少なからぬ効果を与えるということ

ニ 食材は、主体の内に入り込んだ後も、主体の精神に刺激を与えるような存在感を持つということ

ホ 食材は、主体の中で解体・吸収された後も、自己同一性を保ち続けるということ

問六 傍線部②「酩酊」の意味として最も適当なものを次のイ～ホ

から一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ よっぱらうこと
- ロ めまいがすること
- ハ 気を失うこと
- ニ 中毒になること
- ホ 体が震えること

問七

傍線部③「社会的身体の「外」にあるものを「内」に変換する」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 自然の中の「生物」を観察することによって、「食物」についての文化的な知恵を生み出すということ

ロ 「生物」の身体は「食物」となるようにあらかじめ処理がなされた後、人間社会の内部で加工されるということ

ハ 自然と社会どちらにも属する人間の身体を通過させることで、「生物」を「食物」という資源にするということ

ニ 社会に生息する「生物」は人間の身体の内へ運び込まれ、「食物」として吸収されるということ

ホ 自然と文化の境界を超え、「生物」を人間の身体に資する「食物」として取り込むということ

問八

傍線部④「禁忌」の言い換えとして最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ モード

ロ タブー

ハ アンチテーゼ

ニ コンプライアンス

ホ イニシエーション

問九

傍線部⑤「可食性の網目」の意味として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 食材として認定された生物しか捕獲してはいけないという掟

ロ 食材とみなされるものを共同体内に流通させるためのネットワーク

ハ 食べられる生物種と食べられない生物種とを分ける規範

ニ ある生物が食べてもよいものとして判断されるまでにかかる時間

ホ 人体に害をもたらすかもたらさないかを峻別する生物学的な知見

問十 傍線部⑥「他種との共存による協働のパターンが、集合体レ

ベルでの生命活動の維持に関わっている」の説明として最も
適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークし
なさい。

イ 根や腸における微生物や細菌類は、宿主にとってのエ
ネルギー吸収や危険物排出に関わることで、自らと宿
主との種を超えた共生を実現させている。

ロ 宿主は根や腸を通して外部から生物を取り入れようと
するが、その生物も宿主の内部に形を留め独自に生命
活動を行うことによって、共生圏が生じている。

ハ 微生物や細菌類は、宿主の根や腸の中でエネルギー撰
取や敵からの防御を集団でなすことによって、群れと
しての生存を可能にしている。

ニ 植物の根と動物の腸とは、生物種の違いにもかかわら
ず類似した構造をもっており、宿主たちの生命維持を
手伝う器官となっている。

ホ 人間と細菌類とがコンタクト・ゾーンで団結し協力す
ることができるよう、根や腸は構造化されており、こ
れらの器官の中で多様な生物たちが共存している。

問十一 空欄Ⅱに入る言葉として最も適当なものを次のイ～ホから

一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 区別 ロ 遮断 ハ 上下
ニ 開拓 ホ 貫通

問十二 波線部①「複数の『考える《我》』、②「複数の主体」、③「複

数種」が指示する対象の同異を表した組み合わせとして、最
も適当なものを次のイ～ニから一つ選び、その符号をマーク
しなさい。

イ ①と②は同じで、③のみが異なる対象
ロ ①と③は同じで、②のみが異なる対象
ハ ②と③は同じで、①のみが異なる対象
ニ ①と②と③の指示する対象は全て同じ

問十三 空欄Ⅲに入る言葉として最も適当なものを次のイ～ホから

一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 静態 ロ 業態 ハ 擬態
ニ 常態 ホ 世態

問五 問題文の内容と合致するものを次のイ〜トから二つを選び、

その符号をマークしなさい。

イ いつ何を食材として選び、どうやって調理し食べればよいのかという「可食性」のコードは、地球上の全ての文化にあるわけではない。

ロ 「郷土食 local food」をともに食べることを通して、各地域に住む人びとは強固なつながりによる共同体を維持してきた。

ハ 社会的な出来事として食事が成立するのは、食べ物が単なる物質ではなく、情報としての側面を有していることに起因する。

ニ 内臓の中で展開される生命の運動は、人間が死んでしまった後にも、無数の細菌類によって永続的に行われる。

ホ 「我食べられる」という次元が看過されているため、デカルトによる自己の存在証明の論理は、現在では無用なものである。

ヘ 動物も植物も、食べ物として捉えようとしたところで、捕獲される前の生態が想起されてしまうため、うまく対象化ができない。

ト 「食べるもの」でありながら「食べられるもの」であるという条件は、人間を含む全ての動物に共通している。

二 次の記事を読んで、後の問に答えなさい。

同年の冬のころ、法皇、熊野へ御参詣あり。見物の貴賤、千里の浜まで踵を継ぎ、供奉の月卿雲客、瑞籬のみぎりにひざまづく。すでに本宮証誠殿の御前に御通夜ありて、^② 現当二世の御祈請あり。御前の川波嵐にたぐひ、山をひびかす。ふけゆくまに静まれば、御心をすまして、行末今の御観法ありける程に、夜深更に及び、人静まつてのち、証誠殿の御簾のすそより左の御手とおぼしきが美しげなるを、指し出ださせたまひて、打ち返し打ち返し、度々させたまふ。法皇、これを夢ともなくうつつともなく御覧ありて、人々にはかうとも仰せられず、山上に無双の伊岡の板と申す巫女を召されて、「御不審の事あり。きつと占ひ申せ」と仰せある。巫女、朝より権現をおろし奉りしに、日中過ぐるまでえおりさせたまはず。人々心を静め、度々の輩に至るまで、目をすましてぞ候ひける。程経て後、権現すでにおりさせたまひぬとおぼえて、巫女、法皇に向ひまゐらせて、左の手を捧げ、二、三度打ち返し打ち返し、「これはいかに、これはいかに」と申しければ、法皇、御夢想に御覧せられつるに少しも違はねば、「真実の御託宣よ」と思し召され、急ぎ御座をすべらせたまふ。御たなごころを合せて、「我十善の余薫に

酬ひて、九五の尊位を踏むといへども、それ三界具縛の凡夫なり、神慮はかりがたし。いかでか是非をわかまへんや。よろしく事のよしを示したまへ」と申させたまへば、巫女、よに心細げなる声にて、手に掬ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にもすむかなこの歌占を二、三度詠じて、涙をはらはらと落とし、「君はいかで知ろし召さるべき。明年の秋、必ず崩御なるべし。その後、世間、手の裏を返すがごとくなるべし」と御託宣あり。公卿、殿上人、みな心騒ぎして、色を失ひ、「いかがしてか御寿命延びさせましますべき」と声々に申されければ、法皇も叡慮を驚かさせましまして、重ねて申させたまひけるは、「それ^{*}和光同塵の方便は、抜苦与樂のためなれば、大悲大慈の神慮にも、などかあはれみたまはざらむ。それ厄難を救はせたまはん事、もつとも権現の本誓なり。願はくはかの方法を示したまへ」と泣く泣く申させたまへば、巫女、いよいよ涙を流して、「君は我が朝のあるじとして、四十余回の春秋を治めたまひ、我はこの国の鎮守として、一千余年の甲ふりにたり。しかれば、利生方便の途、あはれみ奉らずといふ事なけれども、定業限りある事には、神力も及ばず。まして、守護の天童、満山の護法も力及ばざる事なり。およそは極楽浄土不退の地をこそ願ひても願はせたまふべけれ。かかる五濁乱漫の憂き世に、御心をと

どむべからず。今はただ今生の事をば思し召し捨てて、後生菩提の御勤めあるべきなり」とて、権現やがてあがらせたまひぬ。

神は明年の秋とこそ示したまへども、君はただ今入滅にふめつやらんと思し召され、臣はまた別れ奉らんやうに悲しみたまふ。上道には供奉の人々所々に従ひ、王子王子の馴子舞、よのつねならぬ旅のよそほひをつかさどり、勇み合ひてこそ参りしに、御下向には引き替へて、皆人、涙を流し、袖を絞り、ただ、亡き人の 乙 する、その儀式にもことならず。熊野詣まうでの下向をば、皆上下悦びの道とこそ申せども、占ひ申しける巫女さへかへりてすさまじく思し召す。

〔保元物語〕より〕

(注) *九五の尊位を踏む：天子の位につくということ。

*和光同塵：神仏が本来の威光を和らげ、民衆に受け入れられやすい姿となつて現れること。

*本誓：本来の誓い。本願。

問一 傍線部①～④の意味として最も適当なものを次のイ～ホから

それぞれ一つずつ選び、その符号をマークしなさい。

① 「踵くびすを継ぎ」

イ 一致団結して

ロ 首尾一貫して

ハ 右往左往して

ニ 土下座して

ホ 行列をなして

② 「通夜」

イ 夜通しの祈願

ロ 夜通しの茶毘

ハ 夜通しの供応

ニ 夜通しの講義

ホ 夜通しの葬儀

③ 「候ひける」

イ 座っていた

ロ 困り果てた

ハ 話し合った

ニ 仕えていた

ホ 疲れ果てた

④ 「事のよし」

- イ 基準 ロ 方法 ハ 善悪
ニ 仔細 ホ 口実

問二 傍線部A「ふけゆくままに静まれば、御心をすまして」の解釈として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 夜遅く、川の波音が静かになったら、法皇は信仰心を高めようとして
ロ 川の波音は夜が更けるにしたがって静かになったので、法皇はお気持ちを静められて
ハ 夜遅く、川の波音が静かになったら、法皇は出家のご決心をなさろうとして
ニ 川の波音は夜が更けるにしたがって静かになったので、法皇は全土掌握のお気持ちもなくなって
ホ 夜遅く、川の波音が静かになったら、法皇は修行をお済ましになろうとして

問三 傍線部B「日中過ぐるまでえおりさせたまはず」、C「これ

はいかに、これはいかに」と申しければ」の主語として最も適当なものを次のイ〜ホからそれぞれ一つずつ選び、その符号をマークしなさい（同じ符号を二回用いてもよい）。

- イ 公卿 ロ 巫女 ハ 法皇
ニ 権現 ホ 見物の貴賤

問四 傍線部D「たなごころ」の漢字表記として最も適当なものを

次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 腕 ロ 襟 ハ 掌
ニ 拳 ホ 懐

問五 傍線部E「いかでか是非をわきまへんや」の現代語訳として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ どうして礼儀正しくしていられますようか、いえ、できません。
ロ どうして物事の道理を理解できますようか、いえ、できません。
ハ どうして平常心でいられるでしょうか、いえ、いられません。
ニ どうすれば物事の道理を理解できるようになるでしょうか。
ホ どうすれば平常心でいられるでしょうか。

問六 傍線部F「手に掬ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にも

すむかな」はどういうことを伝えようとしているか。その説明として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 手にすくった水に映る月の光は、老少不定の世の中でも澄みきっているということ

ロ 手にすくった水に映る月の光が澄みきっているように、法皇は清廉な人物であるということ

ハ 手にすくった水に映る月の光が頼りなげであるように、法皇の命もおぼつかないものであるということ

ニ 手にすくった水に映る月の光のもと、法皇は神仏に手を引かれてあの世に行くということ

ホ 手にすくった水に映る月の光のもと、法皇はあるかどうかわからない世界に向かうことになるということ

問七 傍線部G「せたまひ」は誰から誰に対する敬意を表している

か。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 作者から権現に対する敬意

ロ 法皇から権現に対する敬意

ハ 作者から巫女に対する敬意

ニ 法皇から巫女に対する敬意

ホ 作者から法皇に対する敬意

問八 空欄甲に入る言葉として最も適当なものを次のイ〜ホから一

つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 蛍雪 ロ 山河 ハ 松風

ニ 江月 ホ 星霜

問九 傍線部H「べけれ」の文法的意味として最も適当なものを次

のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 意志 ロ 適当 ハ 婉曲

ニ 可能 ホ 推量

問十 傍線部I「権現やがてあがせたまひぬ」の解釈として最も

適当なものを次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 権現はそのあと何もおっしゃらなくなってしまった

ロ 権現はいつのまにか法皇のそばから離れてしまわれた

ハ 権現はすぐに玉座に上がってお過ごしになった

ニ 権現はそのまま神仏の世界にお戻りになった

ホ 権現は徐々に巫女を我が物としてしまわれた

問十一 空欄乙に入る言葉として最も適当なものを次のイ〜ホから

一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ おくり ロ はなむけ ハ みそぎ

ニ まねび ホ よばひ

問三 問題文の内容と合致するものを次のイ〜へから二つ選び、

その符号をマークしなさい。

イ 法皇は熊野での心霊体験の内容を巫女に打ち明けて、その意味を確かめようとした。

ロ 巫女によると、法皇が亡くなった後、天下は平和になるとのことであった。

ハ 法皇は権現に延命を願ったが、権現はその手立てがないと話した。

ニ 法皇は熊野での心霊体験を、伊岡の板が再現したことで、彼女の言うことを信じた。

ホ 法皇は熊野詣の翌年の秋を待たずして亡くなった。

ヘ 熊野からの帰路は法皇の極楽往生を悦ぶ道中になった。

問三 『保元物語』は軍記物語の一つである。同じジャンルの作品

を次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 大鏡 ロ 伊曾保物語 ハ 落窪物語

ニ 太平記 ホ 日本霊異記